

平成 22 年度第 1 回心理学教育 FD/ICT 活用研究委員会 議事概要

I. 日時：平成 22 年 7 月 10 日（土） 午後 4 時から午後 7 時 30 分まで

II. 場所：私立大学情報教育協会事務局

III. 出席者：木村裕委員長、金子尚弘委員、大島尚委員、中澤清委員

（事務局）井端事務局長、森下主幹、渡邊職員

IV. 議事概要

1. 検討内容

- ・ 初めに、本委員会の今年度検討すべき内容として、「学士力」を明確にした上で、どの部分に ICT を活用することが有効なのかを示し、授業改善モデルを提示することを目的とする。
- ① 次に、心理学教育における ICT 活用の意義について、委員の間で意見が交わされた。
 - ・ ICT 利用の現状として、パワーポイントの利用、オンデマンド型の授業、ネット経由の情報収集について、利点と問題点が検討された。
 - ・ パワーポイントの利用については、黒板では提示できないようなリアルな画像や映像を提示できるという利点がある半面、作成のために教員が多くの労力を払わなければならないこと、学生が自ら学ぶことを促進するような工夫が必要なことが問題点として指摘された。
 - ・ オンデマンド型の授業では、教場での対面型授業との組み合わせが重要であること、技術を持った TA の活用が有効であることなどが紹介された。またネット経由の情報収集も含め、ビデオなどの提示環境における著作権の問題への配慮が必要であることが指摘された。
 - ・ いずれの場合にも、教員と学生との双方向性をどのように確保できるかが、授業における ICT 活用において重要であることが合意された。
- ② 次に、心理学教育で学生が身につけなければならないことが何であるかが議論された。
 - ・ まず、基本用語の習得が必要であることは、委員の意見が一致した。また、そのために LMS を活用できること、心理学検定が一つの枠組みとなり得ることも確認した。
 - ・ その上で、単に知識を身につけるのではなく、学生が自ら考えながら学ぶような授業のあり方が議論された。たとえば、公開されているハーバード大学の哲学の授業のような進め方が心理学で可能かどうかについて、必要な条件も含めて検討された。
 - ・ ハーバード大学の例では、講義とは別に学生がすでにその分野の本を読んでいることが前提であり、そのために大学院生のファシリテータが個別授業を行っていることが紹介され、

大学教員の意識や大学の支援体制が日本の現状とは異なることが問題点として指摘された。

- ・ ただし、学生に対して教員が一方的に講義をするのではなく、学生にグループ学習の機会を与え、学生どうしの話し合いを通じた学びのプロセスを体験させることは可能なのではないかとの問題提起に基づき、実現のための条件が検討された。授業時に学生に発言を求めることは非常に困難であるとの認識から、授業時間外における大学院生の TA の活用、LMS をバックグラウンドとした気楽に発言できるような環境の構築、学習成果の公開とフィードバックによる学びの実感の提供などが提案された。
 - ・ 基礎的な知識の習得が前提とされるならば、ICT の活用事例として e ポートフォリオを導入し、学生が自らの知識を自己点検できるようなしくみを検討することが有効なので、次回の委員会までの宿題とすることになった。具体的には、1 年間に 2 回くらい自身の学びをチェックできる仕組みを ICT を用いて構築し、欠けている部分の補習を大学がバックアップするように工夫する。学生にとっては、押さえておくべき基礎力が明確になり、安心感が与えられる。
- ③ 最後に、「心理学教育における情報教育（中間まとめ）」に対して寄せられたコメントを検討し、修正の作業を行った。修正結果は添付の通り（下線部が修正箇所）。

2. 次回までの宿題

- ① e ポートフォリオの利用法について。
- ② 学びの条件として必要な環境、大学からの支援について。
- ③ グループ学習を推進するための教室外の ICT 利用法について。

V. 次回の委員会開催日

日時：平成 22 年 9 月 18 日（土）午後 5 時から 7 時まで

場所：私立大学情報教育協会事務局

心理学教育における情報教育(中間まとめ)修正版

* ICT: (Information and Communication Technology) 情報通信技術

【到達目標1】

人間の心や行動を理解するために、ICTを用いて文献検索や資料の収集、レポートの作成やプレゼンテーションを行うことができる。

【到達度】

- ① 情報検索・処理・発信に関する基本的な能力を習得している。
- ② 心理学関連の文献、資料の所在を知っており、またインターネット情報の限界を知り、目的に応じて適切に検索することができ、その情報の信頼性を評価できる。
- ③ 適切な引用方法を知った上で、収集した情報に基づいたレポート作成やプレゼンテーションができる。

【教育内容・教育方法】

- ①は、初年次教育で設定されている情報処理科目で対応する。
- ②は、演習や講義などにより、CiNii, PsycInfo, EBSCO などのデータベース、日本心理学会を初めとする内外の心理学関連諸学会・団体のサイト、各種マス・メディアの情報などから、目的に応じた文献や資料の検索方法、情報の信頼性について理解させる。
- ③は、演習や講義などにより、文献や資料の引用の仕方(および剽窃という概念)、自分の考えの述べ方について理解させ、実際にレポートを書かせ、添削する。

【到達度確認の測定手段】

- ①～③は、レポート、テストや教育支援システム等を用いて確認する。

【到達目標2】

人間の心や行動に関わる現象を明らかにするために、実験・調査・検査・観察にICTを活用することができる。

【到達度】

- ① 研究目的に応じて科学的に行動を観察し、数量化することができる。
- ② 収集したデータの解析(適切な解析方法の選択と実施)を行い、その解析結果を評価、解釈することができる。
- ③ 倫理的側面に配慮した研究計画を立てることができる。
- ④ アンケート調査、心理検査にインターネットを利用することの可能性と限界を理解できる。

⑤ 心理学実験にコンピューターを用いることができる。

【教育内容・教育方法】

①は、人間の心や行動をどのように測定できるかについて講義した後、心理学実験法などのような実習科目を通じて、実際に研究課題を設定して、実験や質問紙調査のデザイン作成及びデータ収集・整理を行わせる。(その際、どのようなデータ解析を行うべきであるかについて事前に考えられるようにしておく)。

②は、実習科目において①で得られたデータを分析することを体験させ、その解析結果の解釈を習得させる。

③～⑤は、倫理的側面を教育した上で、ICTを用いる実験や質問紙調査を計画させ、一連の研究プロセスを体験させる。またそのために必要なプログラムの作成法や汎用ソフトの使用法を学習させる。

【到達度確認の測定手段】

①～⑤は、レポートや学習ポートフォリオを通じて確認する。

【到達目標3】

ICTを用いて、社会の諸現象の理解に心理学的な視点を応用することができる。

【到達度】

① ウェブサイトやブログなどから、様々な人間の異質性や多様性の存在を認識できる。

② ウェブサイトやブログなどから、社会現象の背後にある人間の心や行動を理解できる。

【教育内容・教育方法】

①と②は、演習や実習科目を通じて、インターネット上で観察される社会現象の中からいくつかを選択し、問題の原因や対処法について心理学的視点から考察することを体験させる。

【到達度確認の測定手段】

①と②は、レポートや学習ポートフォリオを通じて確認する。